第27回　空也堂と本能寺旧跡

■ 野口家住宅

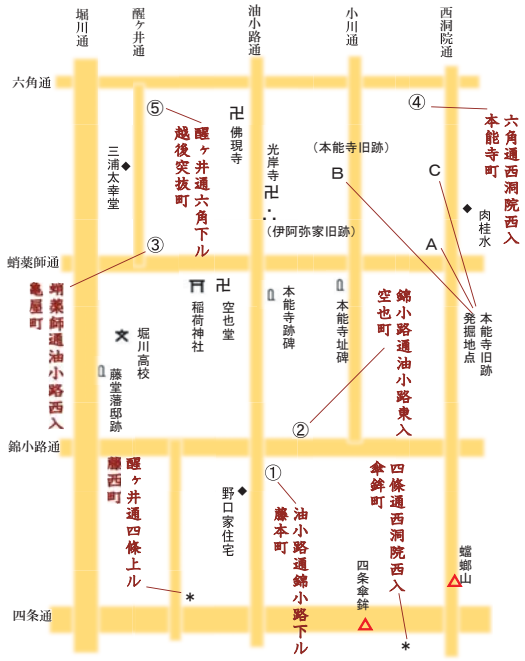
本シリーズ第2回では、町名看板「醒ヶ井通四条上ル藤西町」から出発して南に向かいましたが、今回は、逆に北へ進むことにしましょう。ちなみに、現在の町名看板の位置（四条醒ヶ井の東北角）を正確にいえば、下京区柏屋町で、中京区藤西町の南に隣接しています。

醒ヶ井通は、錦小路通で堀川高校の南塀に突き当たって、ここでいったん中断します。この丁字路を東へ。醒ヶ井通の一筋東の通り、油小路通に出ると、町名看板「油小路通錦小路下ル藤本町」①が貼ってあります。町名が「藤木町」のように見えますが、よく目を凝らすと「本」の短い横棒が消えかかっているがたしかにあることがわかります。「下京區」となっていますが、現在は中京区。

町名看板①の町内に、京都市指定有形文化財の野口家住宅（中京区油小路通錦小路下ル藤本町）があります。京町家の典型。

京都市による駒札の文面を次に引用します。違棚、数寄屋風、長押、釘隠、天袋などは、われわれが住んでいる文化住宅ではすでに姿を消したものです。建物の写真は、駒札の説明にある店舗棟の道路に東面した部分です。

油小路通　錦小路　下ル藤本町①



町名看板の所在（本能寺学区界隈）

野口家住宅

同駒札

野口家住宅

野口家は、代々呉服商を営んできた旧家である。

現在の主屋は、元治元年（一八六四）の大火後に再建されたもので、店舗棟と奥の居住棟を玄関棟で接続した表屋造りの形式となっている。

主屋の表構えは、店舗棟の北側に高塀を接続させた構成である。内部では特に座敷が注目される。野口家文書によると、座敷はもと伏見の小堀屋敷にあったとされるものを、明治四年（一八七一）に伏見の豪商松屋彦兵衛から購入、移築したもので、十二畳半の主室と次の間から成る。主室は一間半の床の間と一間の違棚をそなえ、端正ななかにしゃれた数寄屋風書院の構えをもち、長押の釘隠金物や天袋の引手金具の意匠に、小堀遠州との関わりの深さを思わせる。

この住宅は、京町家の典型例の一つとして貴重であり、昭和五十八年六月一日、京都市指定有形文化財に指定された。

錦小路通　油小路　東入　空也町　②

京都市

錦小路通と油小路通の十字路に戻って、今度は東へゆくと、町名看板「錦小路通油小路東入空也町」②が貼ってあります。この看板も「下京區」となっていますが、現在は中京区。『京町鑑』では、「空也町」について、「古空也上人の庵室此町に有しゆへに呼とぞ」と説明しています。庵室とは空也寺のこと。天正十九年〔一五九一年〕の京都改造のときに京極高辻（現在の寺町高辻）に移され、現在もそこにあります（本シリーズ第11回参照）。

■蟷螂山

空也町の東南、西洞院通の両側は、「蟷螂山町」。祇園祭で蟷螂山（西洞院通錦小路下ル蟷螂山町）が出る町です。『京町鑑』にも、すでに載っていますが、「蟷螂山町」と振りがなをふってあります。現在は、山のほうは、訓で「かまきりやま」と読んでもよいようですが、町名は音で「とうろうやまちょう」と読むのが普通のようです。この近辺では、四条通に出たところに、四条傘鉾が建ちます。すでに本シリーズ第４回で、町名看板「四条通西洞院西入傘鉾町」を紹介しました。

蟷螂山は、御所車の屋根に乗った蟷螂がカラクリ仕掛けで動くのが特徴。南朝方の実務官僚兼武人である四条隆資（正応五年〔一二九二〕～観応三年・天平七年〔一三五二〕）が、北朝に歯向かった様を「蟷螂の斧」にたとえたと伝えられます。『祇園御霊会山鉾記』（塙保己一『続群書類従』巻第五五、続群書類従完成会『続群書類従』第三五輯、一九七二）には、「祇園会山鉾事応仁一乱之後再興」と記した原扉のあと、応仁の乱の前からあった山鉾が列挙されており、その一つとして、「かまきり山、四條西洞院と錦少路間」と記載されています。また、すこし時代が下って、国宝の『上杉本洛中洛外図屏風』（一五七四年に織田信長から上杉謙信に贈られたと伝えられている屏風）の中にも描かれています。どんどん焼けのときに被災したため明治時代に途絶えましたが、昭和五六年〔一九八一〕、約百年ぶりに復活しました。復活時に新調した四周の装飾は、友禅染で統一。

閑話休題。ここで、四条隆資のこと。南北朝時代の争乱の中で、南朝を実質的に支えるほどの活躍をしたのに、『太平記』では重きをおかれていない人物です。ところが、『増鏡』では、その後の活躍を暗示するように、その巻尾（鎌倉幕府滅亡にともない、後醍醐天皇が配流された隠岐の島から帰京した正慶二年・元弘三年〔一三三三〕の記述）で、四条隆資の還俗のことに触れています。

『上杉本洛中洛外図屏風』の蟷螂山
米沢市上杉博物館『国宝上杉本洛中洛外図屏風』七ページ（二〇〇一）

四條中納言隆資といふも頭おろしたりし、また髪おほしぬ。もとよりちりを出づるにはあらず、かたきの爲に身を隠さんとて、假初にそりしばかりなれば、今はた更に眉をひらく時になりて、男になれらん何のはゞかりかあらんとぞ、おなじ心なるどち言ひあわせける。天台座主にいませし法親王だにかくおはしませば、まいてとぞ誰にかありけん、その頃きゝし。

すみぞめの色もかへしつつき草の
うつればかはる花のころもに

墨染めの衣の色も俗世に戻ればはなやかに、月草も日が経てば、花の衣に変わるように、人の心も移ろいやすい。

『増鏡』終

『増鏡』巻二〇、「月草の花」
『水鏡・大鏡・今鏡・増鏡』（国民文庫刊行会）一九一〇

（現代語訳）

四条中納言隆資という方は、頭を丸めていらっしゃったが、後醍醐天皇が帰京なさなったので、髪を伸ばして還俗なさった。もとよりこの世を嫌って出家なさったのではなく、敵から身を守ろうとして、仮初めに剃髪したのであるから、「今はちょうど憂いを開くときになったので、還俗して俗世に戻るのに何の障碍があろう」と、同じ気持ちをもっているものたちは互いに言い合った。「天台座主でいらっしゃった大塔宮法親王でさえも還俗なさったのであるから、ましてや誰が還俗してもかまわない」と、その頃の噂であった。

正慶二年・元弘三年〔一三三三〕は鎌倉幕府滅亡の年。翌年は正慶三年・建武元年〔一三三四〕は、後醍醐天皇がいわゆる建武の新政を始めた年で、南北朝時代の始まり。還俗した四条隆資は、南朝を支えて獅子奮迅の働きをします。『太平記』によれば、後村上天皇を奉じて男山（石清水八幡）に拠点を築き、観応三年・正平七年〔一三五二〕には京都に攻め入って、東寺によっていた足利軍を攻めますが、敗れてしまいます。さらには、男山（石清水八幡）を足利尊氏の嫡男義詮に攻められて、敗走する後村上天皇の軍の殿をつとめて、結局敗死。

蟷螂山のスポンサーとして陳大年が伝えられていますが、これが本当だとすると、彼は足利義満に招かれて京都に来ていることを考慮に入れる必要があります。足利氏と戦った、いわば敵方の四条隆資をまつったのは、おそらくは、四条隆資の魂鎮めのためでしょう。

■　蟷螂山と外郎――珍説命名考

蟷螂山といえば、小田原の外郎家との以外な関係。外郎はお菓子のほうが一般に知られていますが、もともとは生薬を配合した丸薬です。正式の名前は、「透頂香ういらう」で、写真にあるように、失礼を顧みずわかりやすくいえば、大粒の仁丹。もっと

も、外郎のほうが仁丹よりもずっと古いのですが。味はもちろん違い、効能は「透頂香ういらう」のほうが広範囲です。筆者の現在住んでいるところは小田原にごく近いので、店まで出かけて購入しました。

透頂香 ういらう

外郎家は、十四世紀後半に来日した陳延祐が祖。その子陳大年のとき、足利義満に招かれ、典医兼外交顧問となりました。京都では、蟷螂山町内（町内の西側、西洞院通に面する）に住み、薬や菓子を商って得た財産で蟷螂山を創始し、援助を続けたといいます。

現在の蟷螂山町は、元禄時代の絵図（元禄九年〔一六九六年〕京都大絵図、日文研データベース、http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/santoshi_157.html）では「ウイロウ丁」と記されています。ただし、この絵図では、町内の西側は筑前久留米の有馬氏の知行地、東側は肥前平戸の松浦氏の知行地となっていて、陳外郎宅は記載がありません。ところが、インターネットで検索できる『城池天府京師地図』（寛延三年〔一七五〇〕）では、西洞院川の東側に沿った通りは、「外郎町」という表示があり、その通りに面して「外郎家」と表示されています。西洞院川の西側に沿った通りには、「有馬氏京亭」の表示があります。

分家の外郎家は一五〇四年に小田原市に移り（長男が宇野の姓を名乗るようになって小田原に移りましたので、一応分家としておきます）、弟が継いだ京都外郎家はのちに廃絶しましたので、長い間蟷螂山と外郎家の関係は途絶えていました。最近になって、外郎売の口上（歌舞伎十八番「外郎売」）を祇園祭宵山のおりに蟷螂山の前で公演するなど交流が復活しています（京都新聞二〇〇八年七月二日付記事）。

『山城名勝志』巻四では、「陳外郎宅」の項目があり、次のような説明があります。

陳外郎宅今在二西ノ洞院四條ノ北、西側一、是舊地歟、
殿中年中行事云、十二月廿七日外郎進上之透頂香五裝、持參ノ出座。拜賀之、

『山城名勝志』、大島武好、宝永二年〔一七〇五〕

『改定史籍集覧』二三巻、近藤瓶城編、臨川書店、一九八四
新加通記類第一八

（書き下し文）
陳外郎宅（今西ノ洞院四條ノ北、西側に在り。是れ舊地か。）
殿中年中行事に云はく、（十二月廿七日）外郎進上の透頂香（五裹）、持参ノ出座。之を拜賀す。

さらには、五山文学の中に、陳外郎宅で作った漢詩があることが述べられています。当時の禅僧は、中国（明）との外交を担っていましたので、帰化人である陳外郎と関係を保っていたのでしょう。

ついでに。外郎家については、意外なことに、貝原益軒『筑前国続風土記』（一七〇九年完成、写本のみ）にも載っていますので引用しましょう。

陳員外郎と云者唐土台州の人なり。後光嚴院應安二年に、亂をさけて日本に來り、博多に住す。上京して將軍義滿公に種々の合藥を獻ず、就中透頂香を甚稱美ありて、京都西洞院に宅を給はる。其子孫世々透頂香の秘方を傳へて、代々久しく博多に住し、亦京都にも住せり。いつの時よりか博多には住せず、今も京都西洞院四條上る町に、其子孫家をつぎて透頂香を賣て家業とす。又相州小田原の透頂香は、北條氏政の時、外郎が家僕を小田原に遣はし、透頂香を賣らしむ。今に其子孫傳はりて彼所に住す。外郎が家製の藥なる故、透頂香を外郎と名づく。透頂香の本方、此二家より外に傳はらず。透頂香を日本にて製せしは、博多を初とす。

貝原益軒『筑前国続風土記』、一七〇九
（益軒会編、『益軒全集巻之四』、益軒全集刊行部、一九一〇）
中村学園大学 http://www.nakamura-u.ac.jp/library/

（現代語訳）
陳員外郎というのは、中国の台州の人である。後光厳天皇の応安二年〔一三六九〕に、元末明初の乱をさけて来日し、博多に住んだ。上京して将軍足利義満公にいろいろな配合薬を献じた。中でも、透頂香を、非常に賞美されて、京都西洞院に邸宅を賜った。その子孫は長年にわたって透頂香の秘方を伝え、代々久しく博多に住み、また京都にも住んだ。時代ははっきりしないが、その子孫は博多の邸宅を引き払い、今も京都西洞院四條上る町にて家を継いで、透頂香を売って家業としている。また、相州小田原の透頂香は、北條氏政の時代に、外郎が、家僕を小田原に派遣して透頂香を売らせたのがはじまりである。今もその子孫が継いで同じところに住んでいる。外郎自家製の薬であるから、透頂香を外郎と呼ぶようになった。透頂香は、この二つの家以外には伝わっていない。このように、透頂香を日本で作ったのは、博多が初めてである。

貝原益軒の記載が正しいとすれば、十八世紀初め（江戸時代中期）まで京都外郎家と小田原外郎家が並存していたことになります。京都外郎家が室町幕府の瓦解とともに廃絶したという話（外郎家と足利氏の関係からありそうな話）もありますので、ほんとうはどっちなんでしょうか？　貝原益軒の書きぶりは、「今も京都西洞院四條上る町に、其子孫家をつぎて」と所在地の記載も具体的ですので、こちらに軍配をあげたくなりますね。

最後の「透頂香を日本にて製せしは、博多を初とす。」とは、お国自慢の最たるもの。ちなみに、歌舞伎十八番の「外郎売」の初演は享保三年〔一七一八年〕で、貝原益軒の『筑前国続風土記』の成立より、約十年後のことになります。ついでに、外郎家は筑前国博多→京都→相模国小田原。かくいうわたくしめは、筑前国鳥旗（戸畑）→京都→相模国小田原（の隣町）。多少、似ていなくもない。

もう一つついでに。若干強引ですが、「蟷螂」の名前の由来を考えました。まず、「とうろう」と「ういろう」は発音が似通っていますね。さらに「蟷螂」の字。虫偏を除けば、「當郎（当郎）」になります。「当たり外れ」という言葉がありますので、「當郎（当郎）」と「外郎」は対になります。「外（はずれ）」は縁起がわるいので、「外郎」の「外」の字を佳字の「當（当）」に変えると、「當郎（当郎）」。その上で、虫偏を付けて「蟷螂」と、洒落たのではないか。つまり、「外郎」→「當郎（当郎）」→「蟷螂」の道筋です。眉に唾、わたくしめの新説です。しかし、蟷螂が外郎のもじりとは、響きといい、文字面といい、いかにももっともらしいではありませんか。この新説だと、蟷螂山と陳外郎の結びつきは、大変に強いということになります。四条隆資の御所車の上に、スポンサーであった外郎家のもじりの蟷螂。祇園祭の山鉾の意匠の中で、蟷螂山は群を抜いて奇抜なので、不思議に思っていましたが、このように考えると、腑に落ちます。

「当たり外れ」ときたら、籤。折りよく、宵山の蟷螂山会所では、カラクリ仕掛けの蟷螂が運ぶおみくじが楽しめます。「當郎（当郎）」だから、きっと、大当たりの大吉か、運がなくとも小吉でしょう。昔（といっても五十年ほど前）、神社の縁日などで、ヤマガラのおみくじ引きをよく見たものでした。

蟷螂山と陳外郎の縁を偲びて

蟷螂の籤は外れず笑こぼる　艸蟲斎
山雀の藝を学ぶか神籤引　同右
外郎は蟷螂のもつ玉に似て　同右

■　空　也　堂

堀川錦小路の東北は、堀川高校です。もともと、堀川高校の敷地は、藤堂高虎の下屋敷があったところ。堀川通に面した正門の脇（中京区東堀川通蛸薬師下ル東側）に、「此付近藤堂藩々邸跡」の碑が建っています。この藩邸は、禁門の変のどんどん焼で焼失しました。

堀川高校の北側の通りは、蛸薬師通。醒ヶ井通との丁字路の東北かどに、町名看板「蛸薬師通油小路西入亀屋町」③を見つけ

堀川高校

藤堂藩藩邸跡の碑

蛸薬師通　油小路　西入　亀屋町③

ました。この看板も「下京區」となっているが、現在は中京区。

堀川高校の東北かどに稲荷神社（中京区蛸薬師通油小路西入亀屋町）があります。堀川高校の敷地は江戸時代は藤堂藩邸でした。この稲荷神社は、藤堂藩邸の東北かど（鬼門）に祀られていた民部稲荷、亀屋町内の龍田稲荷、四坊堀川町の御福稲荷の三神を、合祀しています（『本能学区まちづくりのしおり』による）。ふつうは、龍田稲荷神社と呼んでいるようです。この神社の所在地は、町名看板③と同じです。

龍田稲荷神社

写真でもわかるように、この境内はこんもりとした杜になっています。ここには、中京区の区民誇りの木に選ばれている神木、オガタマノキ（指定番号C―08）があります。かなりの年数を経ているが、樹齢は不明。

駐車場を隔てて、空也堂（中京区蛸薬師通油小路西入亀屋町）があります。地図には、極楽院として載っていることもあります。宗旨は天台宗。空也堂の所在地も、町名看板③と同じです。

空也堂の門前には、京都市による駒札（案内板）が建っています。写真を載せますが、念のために、引用しておきましょう。

空也堂

空也堂駒札

空也堂

空也を本尊とするため空也堂と呼ばれるが、正しくは紫雲山光勝寺極楽院と号する、天台宗の寺。天慶二年（九三九）、空也上人の開創といわれ、当初は三条櫛笥にあったので櫛笥道場とも市中道場とも呼ばれた。応仁の乱で焼亡したが、寛永年間に現在地に再建された。空也は鐘を叩き念仏を唱えて全国行脚し、仏教の庶民階層への布教に尽力する傍ら、橋を架け、道路や井戸を整備し、野にある死骸を火葬して荼毘に付すなど社会事業も行った。そのため、空也は市聖とか阿弥陀聖と称され、後の一遍をはじめとする布教僧に大きな影響を与えた。

毎年十一月の第二日曜日に、空也上人を偲んで開山忌（空也忌）の法要が営まれる。王服茶の献茶式の後、空也僧による歓喜踊躍念仏と重要無形民俗文化財の六斎念仏焼香式が奉修される。

京都市

『都名所図会』巻之一（安永九年〔一七八〇年〕刊行）には、「紫雲山極楽院光勝寺」の項があり、「四条坊門堀川の東、敲町にあり、空也堂と号す。」と説明し、本尊の空也上人像と定盛法師像などが安置されていることを述べています。さらに続けて、

空也上人〔九〇三～九七二〕が鞍馬山の奥に庵を結んでいた折、鹿が夜毎に来て鳴き、上人の閑坐を慰めた。ある夜、鹿が来ないのでいぶかっていると、平定盛（あるいは貞盛）が猟で得た鹿を携えて来て、この山で討ち取った旨を告げた。上人は悲しみ、皮を裘とし、角を杖の頭に挿して、布教の折には常に携えた。定盛は、上人の弟子となったが、妻子を連れ、有髪の俗体で、念仏の教化に勤めた。寒中に市中を徘徊したが、その様は、瓢を叩いて、上人作の和讃を称えながら踊った。今、空也堂の境内には、定盛法師の子孫と称する八軒があり、鉢叩と称し、茶筌の製造を業としている。

というような意味のことが記載されています。

空也僧の念仏踊を「歓喜踊躍念仏」といい、江戸時代は、瓢箪を叩いて踊るのが目を惹いたので、「鉢叩き」とも呼ばれていま

した。空也堂念佛踊（鉢叩き）を踊る、半俗の空也僧のことも鉢叩きと呼ばれました。空也堂念仏は、本シリーズ第９回でも、与謝蕪村に関連して取り上げ、『都名所図会』の挿絵も引用しました。ここでは、『都年中行事画帖』の空也堂念仏の図を載せておきます。

■　王服茶と茶筌

上述のように、『都名所図会』は、空也堂の所在地を、「敲町」としています。『京町鑑』には、「亀屋町」の俗称を「敲町」というと記載されています。もちろん、鉢叩きに由来する俗称です。

亀屋町。俗に敲町とも云。鉢たゝきの謂れなり。則、南側に空也堂極楽院有。時宗也。此寺、開山空也上人忌とて毎年十一月十三日念佛會有。洛中へ出る鉢たゝきは此所より出る。此鉢たゝき茶筌を造り常の業となす。扨、此町北側上ル町は越後突抜也

白露『京町鑑』、宝暦十二年〔一七六二〕

『新修京都叢書第十巻　山城名跡巡行志・京町鑑』光彩社（一九六八）

空也堂の駒札にある「王服茶」というのは、六波羅密寺でおこなわれている「皇服茶」と同じ起源をもつもの。「村上天皇の天暦五年〔九五一年〕に京都に流行した疫病の退散を祈って、空也上人が十一面観音を造立し、その像を車に載せ、念仏を唱えながら、病者に茶を授けたところ、疫病が鎮まった」と伝えらていま

『都年中行事画帖』（詞書―江馬務、画―中島荘陽）「空也堂念仏」の図（国際日本文化センター「都年中行事画帖データベース」より引用）

す。青竹を八葉の蓮片に割った道具で茶をたて、まず天皇に差し上げたのち、庶民に振舞ったということから、「王服茶」。中には、梅干と結び昆布が入っています。

「青竹を八葉の蓮片に割った道具」というのが、茶筌（茶筅）の原型。この表現からは、筅（中華鍋などのこげ落としに使うもの）のような形と考えられ、抹茶用の工芸的な道具とは違っていたと推測されます。茶筌で点てるといっても、空也の時代にはどんな様子だったのでしょうか。もしかしたら、沖縄のぶくぶく茶みたいなものかもしれない。これは、単に、「おうぶく」と「ぶくぶく」の連想です。

空也上人の始めた「王服茶」と、空也僧（鉢叩き）が生業とした茶筌製造がここで結びつきます。つまり、毎年、正月三が日に空也堂の茶筌で茶をたてて服すれば、年中邪気を免れるという言い伝えになります。「王服茶をたてる茶筌は空也堂のものでなければご利益がない」というのは、なかなか巧妙なブランド戦略ではありませんか。

年の暮に新しい茶筌を求めて、新年に大福茶を点てる風習を読み込んだ狂歌が、好都合にも、『古今夷曲集』（寛文五年〔一六六五〕刊行）に載っています。「千早ぶる」は神に掛かる枕詞。これに「古茶筅」を掛けています。「たつ」は「点つ」と「立つ」を掛けたもの。

ちはやふる茶筅もけさはあらたまり
たつ大ぶくの神の春哉　満水

『古今夷曲集』巻第一・春歌・五

岩崎佳枝、網野喜彦、高橋喜一、塩村耕校注、『七十一番職人歌合・新撰狂歌集・古今夷曲集』岩波書店、新日本古典文学大系六一（一九九三）

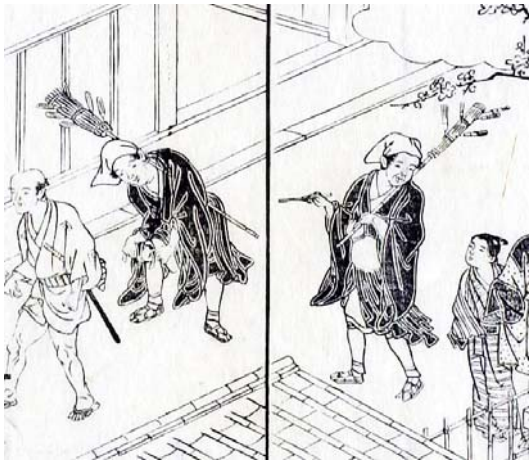
では、空也僧は、どのように茶筌を売り歩いたのでしょうか。後述するように、去来「鉢扣の辭」には、墨染の法体（僧体）あるいは萌黄に「違い鷹の羽」の紋を付けた俗体で売り歩いたとあります。法体の様子は、都名所図会巻之一の「柳の水」（中京区西洞院通三条下ル東側柳水町）の図の中に描かれていますので、一部を切り取って引用しましょう。

図の中央に、定盛頭巾を被り、墨染の法衣を着た者が二名います。一人は、緩んだ脚絆の紐を結びなおしています。二人が肩に担いでいる藁苞に、突き刺してあるものが見えますね。それぞれの藁苞に挿してある、細長い数本が件の茶筌です。それを暗示するように、この図の左上に空也堂。隔てる雲の中に、空也僧（鉢叩き）の茶筌売のことが説明してあります（全体図は次回の「柳の水」ところに載せます）。

俗体の鉢叩きが茶筌を売っている様子は、『人倫訓蒙図彙』（元禄三年〔一六九〇〕刊、第七巻）に描かれています。袖や背中に、鷹の羽の紋がみえ、茶筌を挿してある藁苞と瓢箪をもっています。

■　狂言の鉢叩き

『福部の神・勤入』は、鉢叩きを題材にした大蔵流狂言です。古くは『はちたたき』と呼ぶ場合もあり、同じ演目が、和泉流で



鉢叩き（法体）の茶筌売（『都名所図会』巻之一　柳の水の図の一部）
（国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用）

は『瓢の神』や『鉢叩』、鷺流では『鉢叩』とも呼ばれています。粗筋を次に示しましょう。

鉢叩き（甲）が、能力頭巾（力仕事をする下級の僧が被る頭巾）を被り、金の瓢箪と撥を腰につけて、いくつもの茶筌を差した笹を肩にして登場します。そのあと、囃子とともに、鉢叩き（乙）が角頭巾を被り、鉦鼓と撞木を腰にさした扮装で、また数人の鉢叩きが、角頭巾

鉢叩き（俗体）の茶筌売
（『人倫訓蒙図彙』元禄三年〔一六九〇〕刊、第七巻）
京都大学付属図書館のデータベース
（http://hdl.handle.net/2433/18072）

を被り、銀の瓢箪と撥を腰に差した扮装で、やはり茶筌をつけた笹を肩にして、「治まれる、都の春の鉢叩、叩きつれたる一節を、茶筌召せと囃さん」と謡いながらあらわれます。一同は、同道して、北野神社末社の瓢の神（福部の神）へ参詣し、例年通り勤行することにします。礼拝をすませ、瓢箪や鉦鼓を打ち鳴らし、和讃を唱えながら踊ります。

あなたの門ではヒョ、こなたの門ではタン、
たんたんからりころりと打ち鳴らいて、願う

後生は茶筌召せ。茶筌召せ。佛法あれば世法
あり、煩悩あれば菩提あり、柳は緑、花は紅
のいろいろなれば、急いで後生を願うべし。
なもうだ。はるいた。はっぱいと茶筌。

脇狂言『福部の神・勤入』。小山弘志校注『狂言集上』
日本古典文学大系第四二巻、岩波書店（一九六〇）

そのうちに、福部の神があらわれて、いつも供えてある酒がないと催促し、酒がくるとよい機嫌で、この世が栄えるように舞いおさめました。

「なもうだ」は「南無阿弥陀仏」の転。「はるいた」は「波羅蜜多」の転。「はっぱい」はもう一つよくわからないが、「初祓」が訛ったものか？

なお、野村萬斎による公演の動画を、Biglobe の動画サイトからダウンロードすることができます。扮装や「なもうだ」の繰り返しを実際に見ることができます。

■　蕉門俳諧と鉢叩き

■　去来の「鉢扣の辭」

「鉢叩き」の題材は、蕉門の俳人にとって、芭蕉の思い出につながる特別な意味をもっています。向井去来（慶安四年〔一六五一〕～宝永元年〔一七〇四〕）による俳文「鉢扣の辭」が『風俗文選』（森川許六編、宝永三年〔一七〇六〕）に載っていますので、引用しましょう（振りがな追加。俳句の部分はカギ括弧で括りました）。芭蕉が、鉢叩きの見物のために去来の草庵（落柿舎）を訪ねたときのできごとを題材にしています。

鉢扣の辭　　去来

師走も二十四日。冬もかぎりなれば、鉢たゝき聞むと例の翁わたりましける。こよひは風はげしく、雨そほふりて、とみに來らねば、いかに待ち侘び給ひなむといぶかりおもひて、「箒こせ眞似ても見せむ鉢扣」と、灰吹の竹うちならしける。其聲妙也。火宅を出よとほのめかしぬれど、猶あはれなるふしぐゝの似るべくもあらず。かれが修行は瓢箪をならし、鉦打たゝき、二人三人つれてもうたひ、かけ合へても諷ふ。其唱哥は、空也の作也。かくて寒の中と、春秋の彼岸は、晝夜をわかず、都の外、七所の三昧をめぐりぬ。無縁の手向のたふとければ、かの湖春も、「わが家はづかし」とはいへり。常は杖のさきに茶筌をさし、大路小路に出て、商ふ業かはりぬれど、さま同じければ、「たゝかぬ時も鉢扣」とぞ、曲翠は申されける。あるひはさかやきをすり、或は四方にからげ、法師ならぬすがたの衣引かけたれど、それも墨染にはあらず。おほくは、萌黄に鷹の羽。打ちがへたる紋をつけて着たれば、「月雪に名は甚之丞」と越人も興じ侍る。されば其角法師が去年の冬、「ことぐゝく寐覺はやらじ」と吟じけるも、ひとり聞にやたへさりけむ。打ちとけて寝たらむは、かへり聞かむも口おしかるべし。

明して社との給ひける。横雲の影より、からびたる聲して出來れり。げに老ぼれ足よはきものは、友どちにもあゆみおくれて、ひとり今にやなりぬらんと、翁の「長嘯の墓もめぐるか鉢たゝき」と、聞え給ひけるは此あかつきの事にてぞ侍りける。

向井去来「鉢扣の辭」森川許六編『風俗文選』（宝永三年（一七〇六））

伊藤松宇校訂、岩波文庫、三四六―三六五（一九二八）

（理解のためのメモ）「三昧」は三昧場ともいい、葬送の地・火葬場、あるいは墓地のこと。「七所の三昧」は、諸説あって一定しないが、鳥辺山、阿弥陀峰、黒谷、船岡山（蓮台野）、金光寺、西院、狐塚（栗栖野）をあげておきます。「萌黄」は、春に萌え出る草の芽の色で、上に引用した『都年中行事画帖』の「空也堂念仏」図で右上の人物が着ている着衣の色がそれ。「火宅」は、現世のことで、火事の家にたとえたもの。「社」は、国訓で、助詞の「こそ」のこと。そういえば、ベルリンオリンピックに出場し一万メートルで入賞して、記録映画『民族の祭典』でヒーローになった選手の名前が、村社講平（一九〇五～一九九八）といいましたね。「横雲」は、明け方に東の空にたなびいている雲。

俳文は、言外の含蓄をひそかに楽しむのがよいので、それを表に出すのは身も蓋もない。したがって、言外の含蓄を補って現代語訳を与えるのは愚行ですが、あえて無理矢理に訳してみました。この文の中に引用されている俳句については、全文を追加しておきました。

（現代語訳）

鉢叩きの辞　　去来

師走も押し詰まって二十四日。冬もこれで終わりなので、鉢叩きを聞こうと、例の芭蕉翁がわたしの草庵にいらっしゃった。この日は風が激しく、雨もそぼ降って、鉢叩きは、すぐには来ない。それで、芭蕉翁が待ちくたびれてしまわれるのではないかと心配になって、

箒こせ眞似ても見せむ鉢扣　去来

と、火吹き竹を打ち鳴らした。その音は、もっともらしく聞こえた。芭蕉翁は「外に出て打ち鳴らしたら。内で鳴らすよりも鉢叩きらしくきこえるだろう。（真似をするなら、現世の草庵の中よりも、外はずっと来世に近い）」とそれとなくおっしゃったけれども、あのすばらしい節々には似ても似つかない。鉢叩きの修行は、瓢箪をならし、鉦を打ちたたき、二人三人連れだって、念仏を唱え、掛け合いで詠う。唱える歌は、空也の作である。このようにして、寒中と春秋の彼岸は、昼夜の区別なく、京都の外にある七箇所の墓地をめぐる。無縁のものにも手向をするのが尊いので、あの湖春も、「わが家はづかし」と言った。

米やらぬわが家はづかし鉢敲　湖春

ふだんは、杖の先に茶筌を差して、都の大路や小路に出て、商う稼業に変わっても、風体は同じなので、「たたかぬ時も鉢扣」と、曲翠は、まさにその有様を詠わ

れた。

おもしろやたゝかぬ時の鉢叩　曲翠

一方で、あるものはさかやきを剃り、あるものは四方の髪を結びあげて、法師ではない姿で売り歩く。着ている衣は墨染ではなく、多くは萌黄で、鷹の羽根が交差した紋をつけて着ていて、きりりと恰好がよい。俗名甚之丞のときには恰好がよいのに、冬の修行のときは、月と雪の舞台装置にもかかわらず、くたびれた僧の姿になってしまうのを、ついつい冷やかして、「月雪に名は甚之丞」と越人もおもしろがった。

鉢叩き月雪に名は甚之丞　越人

そんなわけで、其角法師が去年の冬に「ことごとく寝覚はやらじ」と吟じたのも、

ことごとく、寝覚めはやらじ鉢叩き　其角

「まさか寝覚めのときにはこないだろう」と寝てしまったいいわけをしているようにみえるけれども、その実、寝覚めにひとりで聞くのがわびしく耐えられなかったのだろう。

今夜は連れがいるので、そんないいわけをする必要はないが、寝てしまうのもどうか。「一緒に寝てしまって、通り過ぎたことをあとで聞くのもくやしいだろう。今夜は、いっそ夜明かししてしまおう」と芭蕉翁はおっしゃった。明け方に雨があがって、東の空にたなびく雲の影から、しわがれ声がして、鉢叩きが出てきた。まったく老いぼれて足が弱いので、一行から遅れてしまって、一人だけ今たどり着いたのだろうと、芭蕉翁が

長嘯の墓もめぐるか鉢叩き　芭蕉

とおっしゃったのは、この明け方のことであった。

芭蕉は、「鉢叩きを歌に詠み込んだ長嘯が、七所の三昧のひとつ鳥辺野の近くに葬られていること」を思い出して、「長嘯の墓をめぐったのなら、鳥辺野のある東山から落柿舎のある嵯峨野まで歩くことになる。老いぼれて足の弱った空也僧（鉢叩き）には酷なことで、着くのが明け方になったのは仕方のないことだ」と同情しています。

■　木下長嘯子のこと

長嘯は木下長嘯子のこと（永禄一二年〔一五六九〕～慶安二年〔一六四九〕）。歌人。豊臣秀吉夫人（北政所ねね）の甥で、小浜城主。関ヶ原合戦の折に、東山に隠棲。墓は高台寺。人生の前半は武将、後半は歌人。その数奇な人生は、『近世畸人伝』にも採りあげられています。

芭蕉の句は、長嘯子の歌集『挙白集』（慶安二年〔一六四九〕刊）の最末尾、辞世の歌のすぐ前にある歌を踏まえています（はちたたきの歌の詞書は、インターネットの「千人万首」http://www.asahi-net.or.jp/sg2h-ymst/yamatouta/sennin.htmlの記載から補いました。辞世の歌の詞書は、『近世畸人伝』の「木下長嘯子」の項から補いました）。

はちたたき

いつも冬になれば、さむき霜夜のあけがた、なにごとにかあらん、たかくののしりて大路をすぐる。かれが声いと耐えがたく目ざめて、ふと聞きつけたるは、卯の花のかげに隠るる心地す。

2119 はちたたきあかつきがたの一こゑは
　冬の夜さへもなくほととぎす

辞世

王公といへども浅ましき人間の煩ひをばまぬかれず。すべて身のうまれ出ざらんにはしかじ。まして賤しく貧しからんはいふにもたらず。されば死はめでたきもの也。ふたゝび彼故郷に立かへりて、始もなく終もなき楽しびをうる。此たのしみを深く悟らざるともがらかへりていたみ歎く、おろかならずや。

2120 つゆの身のきえてもきえぬおき所
　くさ葉のかげにまたもありけり

あと枕もしらずやみふせりて、口に出るをふと書きつくる。人わらふべきことなりかし

木下長嘯子『挙白集』山本春正編、慶安二年〔一六四九〕

『新編国歌大観』第九巻、角川書店（一九九一）

長嘯子の歌は、「暁方になって、鉢叩きの一声があがった。季節はずれの冬の夜に鳴く時鳥の声のようだ。」の意。

芭蕉をはじめとして蕉門の俳人は、木下長嘯子を敬慕していたといいますから、芭蕉が落柿舎を訪ねて鉢叩きを聞こうとしたのは、この歌がきっかけになっているに相違ない。実際、「鉢叩きの辞」の中で「明して社」と芭蕉がことさらに言ったのは、『挙白集』にある長嘯子の歌を意識していますね。この歌の通りに明け方に鉢叩きが来たので、芭蕉の思い描く通りの状況になったわけです。下世話な言い方をすれば、「しめた！」とおもったのではないでしょうか。長嘯子の鉢叩きの歌が辞世の直前にあることから、「長嘯の墓」と「鉢叩き」という組み合わせが、『挙白集』の構成から強く示唆されたものであるといえます。

鉢叩きに関する芭蕉の句を追加引用しておきましょう

667 乾鮭も空也の痩も寒の中　芭蕉
783 納豆切る音しばし待て鉢叩き　芭蕉

松尾芭蕉『芭蕉句集』「発句編」大谷篤蔵、中村俊定校注『日本古典文学大系』四五（一九六二）

■ 越人の句への『去来抄』記載の評

俳文「鉢扣の辞」に引用されている越人の句に関しては、『去来抄』の「先師評」に芭蕉の考えがうかがえるおもしろい話が載っています。「類句があるのでどうしたらよいか」という去来の質問に対しての芭蕉の評です。

月雪や鉢たゝき名は甚之丞　越人

『猿みの』撰ノ時、去来曰、「この比伊丹の句に、弥兵へとはしれど憐や鉢扣と云有。越が句、入集いかゞ侍らん」。先師曰、「「月雪」

といへるあたり、一句働見えてしかも風姿有。たゞに、「しれど憐や」といひくだせるとは各別也。されど、共に鉢扣の俗体を以て趣向を立、俗名を以て句をかざり侍れば、尤遠慮有べし。又重ての折も有なん」と也。

向井去来『去来抄』宝永元年〔一七〇四〕頃成立。大磯義雄、大内初夫校注『蕉門俳論俳文集』古典俳文学大系一〇、集英社（一九七〇）

（現代語訳）

月雪や鉢たゝき名は甚之丞　越人

『猿みの』を撰したとき、去来が、「この頃、伊丹一派の蟻道の句に、

弥兵へとはしれど憐や鉢扣　蟻道

というのがあります。越人の句について、『猿蓑』への入集はどういたしましょうか」と尋ねた。先師（芭蕉）は答えて、「月雪」というあたりが、この句の工夫であってしかも風姿のよいところである。単純に「しれど憐や」といい下したのとは大いに差がある。しかしながら、両方とも鉢叩きの俗体で句の趣向を決めていて、俗名で句を飾っているので、さらに一工夫を加える必要がある。その上で、また撰に入れる機会もあるだろう。」とおっしゃった。

『去来抄』にある越人の句では、「月雪や」が上の句で、訓読みにしています。一方、俳文「鉢扣の辞」の現代語訳の中では、原文中にある「月雪に名は甚之丞」を尊重して、分割せずに「鉢たたき」を上の句に据え、「月雪」も音読みにしています。このようにすると、「月雪に名は甚之丞」が、ちょうど、歌舞伎の見栄を切った台詞のように響きますね。

法体の鉢叩き（『都名所図会』巻之一）が茶筌売を売っていたのでは、空也忌の寒行のときの風体とおなじですから、「弥兵衛」とか「甚之丞」とかの俗名は、そぐわない。やはり、俗体の鉢叩き（『人倫訓蒙図彙』第七巻）が茶筌を売っていることが、「弥兵衛」とか「甚之丞」とかの俗名を喚起するにはどうしても必要です。

■　句兄弟

『去来抄』の先師評のところで紹介したのは、要するに、「越人の句は、蟻道の句よりすぐれたところがあるが、発想や道具立てが同じであり、もう「一工夫」しなければならない」ということです。この「一工夫」は、実際にどのようなものか。其角編『句兄弟』（元禄七年〔一六九四〕）にはそのヒントが述べられています。

『句兄弟』の前半では、兄の句として、それまでに詠まれた句をおき、其角が視点を転じて作った句をおいて、両者の対比を楽しむ趣向です。その中に、鉢叩に関する蟻道の句（上述）を兄においた一対があります。

廿六番

兄　蟻道

弥兵衛とはしれど哀や鉢敲
弟　（其　角）

伊勢嶋を似せぬぞ誠鉢たゝき

一とせ都にて、冬夜を咄し明しつるに、暁と聞えし瓢箪の音からびて面白く諷ひけるを、酒の肴にもと口づきける当座に、去来が

箒こせまねてもみせん鉢たゝき

と即興しける。そのゝち此句聞え侍る也。

「しれど哀や」と云とりしこそ、ねぬ暁の思ひふかし。自句寒―夜―行の信を起して、かれが一―派の音声のみにて物に似よらずむかしめきたれば、今めきたる句作りに心うつりすなと、俳諧のひさごを鳴ラして邪―路をしめし、句を求る人の感を分たり。

『句兄弟』其角編、元禄七年（一六九四）刊行。宮本三郎、今営蔵校注『蕉門俳諧集二』古典俳文学大系七、集英社（一九七一）

（現代語訳）

廿六番
兄　蟻道

弥兵衛とはしれど哀や鉢敲

（知人の弥兵衛が鉢叩きとして回向しているとは知りながらも、その音はものさびしげに響く。）

弟　（其　角）

伊勢嶋を似せぬぞ誠鉢たゝき

（派手な伊勢縞を着て踊っていても、外見で推し量ってはならない。鉢叩きは誠心誠意の修行である。）

ある年京都で、（芭蕉翁を囲んで）冬の夜を談笑しながら明かした。夜明けになって、瓢箪の乾いた音が響いて、鉢叩きが念仏を面白く詠っているのを聞きながら、「これを酒の肴に」と口々にしゃべっているその場で、去来が、

箒こせまねてもみせん鉢たゝき

（箒をよこしなさい。本物の鉢叩きが来るまでの座興に、鉢叩きの真似をしてみましょう。）

と即興で句を作った。そののち、この句は、人々のあいだで喧伝された。

「しれど哀や」といったのは、夜明かしをした暁の思いが深く詠み込まれている。わたし（其角）の句は、「寒夜行」の真剣さを取りあげている。蟻道の一派が音声だけで、実際の物を見て活写しているのではなく、昔風である。とはいっても、当世風の作句にうつつを抜かしてはいけないと、俳諧への警鐘にたとえた瓢箪を鳴らし、間違った道を明らかにするため、上記の句を作って、俳諧の道を求める人々の考えの一半を明らかにした。

「一とせ都にて、冬夜を咄し明しつるに」と本題と関係のない話を枕においたのは、去来の『鉢叩の辞』や『去来抄』から引き続く論評であることを示すためでしょう。

蟻道の句は、「俗体のときとはうって変わって修行の時は別人のように真剣になる」ということを、「弥兵衛」という俗名と耳から入った情報にもとづいて述べています。一方、其角の句は、俗体を暗示する「伊勢縞」という視覚的な情景に転じて、しかも、「弥兵衛」という俗体・俗名を直接にとりあげずに、修行の真剣さを描写することに成功しています。このように、同じ対象を扱っても、発想や着眼点をずらすことによって、新しい句境に

至ることの大切さ指摘しているわけです。

上記『去来抄』を引用したところは、『句兄弟』流にいうと、結果的に、「蟻道の句を兄、越人の句を弟とした場合にどうか」という問いかけになっているわけです。そこでの芭蕉の答は、「越人の句は、蟻道の句と同様に、鉢叩きの俗体で句の趣向を決めていて、俗名で句を飾っている」というもので、有体にいうと「新しい発想がない」との指摘です。『句兄弟』廿六番は、この論を一歩進めて、芭蕉の「尤遠慮有べし。又重ての折も有なん」という指摘への対処を、実作で示していることになります。

閑話休題。芭蕉は、越人の句に「新しい発想がない」と指摘しているのですが、まずは、「月雪」というあたりが、この句の工夫であってしかも風姿のよいところである。単純に「しれど憐や」といい下したのとは大いに差がある。」と越人の句のすぐれたところを述べています。このあたりが、芭蕉の俳諧宗匠（教育者）としての力量でしょう。けなすだけでは、誰しも萎縮してしまいますね。ほかの弟子がいる万座の中では、なおさらです。弟子にもプライドがあるので、このような配慮があってこそ、蕉門という大きな一派を率いることができたのでしょう。

■　芭蕉追悼と鉢叩き

芭蕉は、元禄七年〔一六九四〕十月一二日に大阪で客死します。この報に接し、江戸から嵐雪と桃隣が京・大阪に来て滞在しました。其角は、大阪に来ていて、芭蕉の死に目に会いました。これらの人々が、同年一一月一三日に、去来の落柿舎に集まります。旧暦一一月一三日は空也忌で、この日から大晦日までの四八日間鉢叩きの行がおこなわれるので、集まる日をわざわざこの日に設定したと推測されます。集まった四人は、芭蕉同席の落柿舎の昔（『鉢叩の辞』で述べられた会合）、『猿蓑』の評（『去来抄』の先師評）など、芭蕉にまつわるできごとをしのびます。『となみ山』（浪化編、元禄八年〔一六九五〕刊行）から、そのときに作られた俳句を引用します。この中では、去来の句が、鉢叩きに対する布施を取りあげて、毛色が変わっています。

刀奈美山引

（前略）

八つの鐘耳ひそかにして、鉢たゝきのしはぶき来る。

是を嵐雪が馳走にと十銭をなげて、千声のひさごをならさしむ。

千鳥なく鴨川こえて鉢たゝき　其角

今少年寄見たし鉢たゝき　嵐雪

ひようたんは手作なるべし鉢たゝき　桃隣

旅人の馳走に嬉しはちたゝき　去来

『ありそ海・となみ山』浪化編、元禄八年〔一六九五〕刊行。宮本三郎、今営蔵校注『蕉門俳諧集二』古典俳文学大系七、集英社（一九七一）

嵐雪の句は、「芭蕉翁が「長嘯の墓」の句（『鉢叩の辞』）を詠んだときには、老いぼれて足が弱い鉢叩きがあらわれたのに、今回の鉢叩きは若すぎる。芭蕉翁の句をしのぶには、もっと年寄の鉢叩きをみたいものだ」という意味でしょう。このように、『鉢叩の辞』、『去来抄』、『句兄弟』、『となみ山』と続く鉢叩きの題材

は、蕉門俳諧にとって特別な意味合いをもっていたことがわかります。

■ 江戸中期の俳諧と鉢叩き

「鉢叩き」は、江戸時代中期には、冬の季題として定着したようで、蕪村の句会の兼題（あらかじめ決められた題）や探題（当日に籤を引いて決める題）にも「鉢叩き」があるくらいです。京都に住んだ蕪村は、鉢叩きを題材にした句をたくさん作っています。『蕪村自筆俳句帳』に載っている句を摘出します。末尾の番号は『蕪村自筆俳句帳』における通し番号です。

一瓢のいんで寝よやれ鉢たゝき　蕪村（六一一）
木のはしの坊主のはしや鉢たゝき　蕪村（六一二）
子を寝せて出行闇やはちたゝき　蕪村（六一三）
ゆうがほのそれは髑髏歟鉢たゝき　蕪村（六四八）
墨染の夜のにしきや鉢たゝき　蕪村（六七六）
終に夜を家路に帰る鉢たゝき　蕪村（六九九）
花に俵太雪に君有鉢たゝき　蕪村（七七七）
西念はもう寝た里を鉢たゝき　蕪村（七七八）

与謝蕪村『蕪村自筆俳句帳』
尾形仂編著、筑摩書房（一九七四）

七七七番の句に出てくる「俵太」は、『近世畸人伝』に記載されている表具屋太兵衛のことです。「貞享、元禄の間の人で、京都新町四条の北に住んでいたが、老後は三人息子の家に泊まっては、昼間は、花、紅葉、月、雪などをめでて過ごした。黒い頭巾を被って、身長より長い杖に酒肴を仕込み、瓢箪型の銀器に酒を入れてもちはこんで浮かれ歩いた。花の下で一人酒を飲み、眼鏡をかけて行き来の人をみてすごした。そのころの京都の畸人の第一といわれていた。」と記されています。「花をめでるといえば俵太（表具屋太兵衛）。雪をめでるのは鉢叩き。どちらも瓢箪を下げている」とでも解釈しておきましょう。

七七八番の句の「西念」は、固有名詞ではなく、僧によくある名前としてもちだしたもの。上の『去来抄』や『句兄弟』のところで述べたのは、「甚之丞」や「弥兵衛」という俗名や「伊勢嶋（伊勢縞）」という俗体に眼目がありますが、七七八番の句では、発想を変えて、「法体」に着眼しているところにあたらしみがあります。たわむれに、『句兄弟』流に書いてみましょう。

番外句兄弟

兄　蟻道

弥兵衛とはしれど哀や鉢敲

弟　蕪村

西念はもう寝た里を鉢たゝき

まず気づく工夫は、俗名によくある名前として、弥兵衛をもちだした兄の句に対して、弟の句では、法名によくある名前として、西念をもちだしていること。「俗名弥兵衛の普段の行状を知っているけれども、法体で「鉢叩き」の寒行をおこなう姿をみると別人のようで、感動ものだ。」というのが兄の句。同一人の俗と僧の対比。弟

の句は、「仮に法名西念と名づけて特定を避けた近所の僧が、普段から修行もせずにぐうたらであることをよく知っている。」という設定に変えて、「里では、ぐうたら坊主の西念はもう寝てしまったのに、半俗半僧の鉢叩きは厳しい行を夜を徹しておこなっている。まったく、世の中、あべこべだ」という意味をもたせた。別人の僧と法体の鉢叩きの対比。

次は、炭太祇の句を紹介しましょう。太祇らしく、鉢叩きと在家の施しに関する句です。蕉門や蕪村の句が、主として「鉢叩き」自体へ興味があるのに対して（俳文「鉢扣（はちたたき）の辞」に引用されている湖春の句などは例外）、太祇のスタンスが違うことがわかります。

摂待（せったい）へよらで過（すぎ）けり鉢たゝき　太祇

暁の一文銭やはちたゝき　太祇

炭太祇『太祇句選』（『中興俳諧集』鳥居清、山下一海、『古典俳文学大系』第一三巻、集英社、（一九七〇））

「せっかく接待をしようと待ちかまえていたのに、鉢叩きがよらずに過ぎていってしまった」というのが第一句。第二句は、「明け方に来た鉢叩きには、少ないけれども一文銭を寄進する」ということです。それにしても、上記『となみ山』で、「嵐雪が馳走にと十銭をなげ」たのは、破格のお布施。そのとき、去来が、「旅人の馳走に嬉しはちたゝき」と詠った意味は、「京都に住んでいる在家の布施は、一銭くらいが相場なのに、旅行で来ている人は剛毅なもの、その一〇倍をお布施にする。鉢叩きも喜ぶはずだ。」となります。

■ 本能寺跡

油小路通の東、蛸薬師通の南のあたりは、元本能寺小学校のあったところです。今は、本能寺特別養護老人ホームになっています。それを記念して、記念碑が建てられています。これと並んで、本能寺跡の碑が新しく建っています。今は、寺町御池に移転していますが、天正十年〔一五八二年〕の「本能寺の変」の時には、この付近にありました。写真を載せた石碑は、油小路通蛸薬師下ル東側のもの。このほかに、蛸薬師通小川西南かどにも「此附近本能寺址」の碑があります（元本能寺小学校が取り壊されるときにここに移されました）。これら二つの石碑の位置は、正確でないことが最近の発掘調査ではっきりしています。

これら二つの碑のある付近の町名は、「元本能寺南町」（蛸薬師通を挟む両側町）。「南町」となっているところが、味噌。味噌たる所以（ゆえん）は、最近の発掘結果によると、天正時代の本能寺の寺域は、北は六角通、南は蛸薬師通、東は西洞院通、西は油小路通に囲まれた一町（平安京左京四条二坊十五町）だったのです。本能寺跡碑があるところより、もう一町北のブロックで、現在の町名で言うと、「元本能寺南町」の北半分、「元本能寺町」、「本能寺町」の南半分。

もともと、元本能寺小学校があった元本能寺南町の南半分のブロック（平安京左京四条二坊十四町）に本能寺が存在したという説は、森幸安が『中昔京師図』（宝暦三年〔一七五三〕）を作成し

本能寺跡碑

本能寺址碑

たときに、北は六角通、南は錦小路通、東は西洞院通、西は油小路通に囲まれた二町（平安京左京四条二坊十四町と十五町）を「本能寺地」としたことによります（ちなみに、錦小路を挟んだ南側は、陳卯良（陳外郎）家と記載されています）。これは、明らかに誤りであるにもかかわらず、南北二町というのが一人歩きをしてしまいました。

元本能寺小学校が取り壊されたときに、発掘調査がおこなわれ、その結果が、京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報二〇〇三―五『平安京左京四条二坊十四町跡』として報告されています。このとき、蛸薬師通（四条坊門通）の南側に沿った下京惣構（そうがま）えの堀が発掘されたことにより、本能寺が蛸薬師通以南にあったという俗説が否定されました。

さらには、京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告二〇〇七―一『平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡』の発掘（A地点）では、蛸薬師通（四条坊門通）の北側に沿った本能寺の堀が発掘されました。この堀は、西洞院川（現在は暗渠）と東端で合流していたことが確実で、本能寺の南限と東限が確認されたことになります。

京都市埋蔵文化財研究所の『リーフレット京都』No.二三一（二〇〇八）発掘ニュース82「本能寺の変を調査する」によると、そのほかにも二箇所（BおよびC地点）の発掘がおこなわれて、さらに決定的な発掘結果がえられています。蛸薬師通と六角通の中間あたり西洞院通に面した場所（関西文化財調査会の担当）で、敷地の内部に堀が入り込んでいることがわかり、さらに鮎（能の異体字。旁の「ヒヒ」を「火火」と読んで避けたもの）の銘を

もつ軒丸瓦などが出土しました。小川通に面した敷地の中央部に当る場所からは、鉦の銘をもつ軒丸瓦や高熱により変色した瓦や壁土が出土しています。

■　畳師伊阿弥

油小路通六角下ルは、油小路通の縦町「六角油小路町」ですが、『京町鑑』では次のように寺が二つあると説明されています。

（油小路通）○六角下ル
▲六角油小路町
此町東側に御疊所伊阿彌氏住居す。又光峯寺佛現寺とていづれも西門徒也。

白露『京町鑑』、宝暦十二年〔一七六二〕
『新修京都叢書第十巻　山城名跡巡行志・京町鑑』
光彩社（一九六八）

「御疊所（おんたたみどころ）伊阿彌（いあみ）氏」の記載が詮索のキーになります。というのは、インターネットで検索できる『城池天府京師地図』（一七五〇）では、油小路通の東側に「光岩寺」、西側に「佛原寺」が記載されていて、運のよいことには、光岩寺の三門の南北に「疊師（たたみし）伊阿弥（いあみ）」の表示があります。したがって、『京町鑑』の光峯寺はおそらくは間違いで、この地図の光岩寺と同じと見てよいでしょう。

驚いてしまうのは、この二つの寺は現在でもほぼ同じ位置にあるのです。光峯寺あるいは光岩寺と表記されている寺は、現在の光岸寺（中京区油小路六角下ル六角油小路町）で、佛現寺あるいは佛原寺と表記されているのは、現在の佛現寺（中京区油小路六角下ル六角油小路町）です。町並にとけ込んで気づかずに通り過ぎてしまうような寺々も、三百年近い歴史を刻んでいるというのは、京都の奥深いところです。

ここで、『京町鑑』と『城池天府京師地図』に載っている「御畳所（畳師）伊阿弥」とは何者でしょうか。織田信長は、技芸・職能に優れたものに「天下一」の号を与えて、顕彰・保護していました。織田信長に仕えた畳師、伊阿弥宗珍もその中の一人で、禁裏関係の建築や安土城広間の畳の製造を請負い、名をあげています。

織田信長が本能寺で敗死したのち、豊臣秀吉の時代になっても、伊阿弥氏は存続します。前田玄以は、豊臣秀吉の配下にあった能吏で、京都所司代を務めていますが、その『玄以法印下知状』の中にも、石見氏（伊阿弥氏）に宛てた天正一一年〔一五八三〕付の下知状が残っています。

吾方（ガ）、疊指爲（たり）二天下一一。信長被（さレ）成（な）二御朱印一（ヲ）、諸（ノ）公事御免許之上者、彌（あまねク）任（まかセ）二秀吉判形（はんぎやう）之旨一（ニ）、不（ざル）レ可（カラル）レ有二相異一之状、如（シ）レ件（ノ）
天正十一　十二月廿日
石見

『玄以法印下知状』塙保己一編『続群書類従・第二三輯下』
続群書類従完成会、平文社（一九二五）

（書き下し文）

吾が方、疊指天下一たり。信長御朱印をなされ、諸の公事御免許の上は、彌く秀吉判形の旨に任せ、相異あるべからざるの状、件の如し。

天正十一年十二月廿日

石見

下知状ですから、「吾方」は、相手を親しんで呼びかけることばと解しておきましょう。「疊指」は畳職人。「判形」はお墨付き。「石見」とは、願い出て「伊阿弥」をこのように表記することを許可されたもの。正確かどうか自信はありませんが、一応の現代語訳を示しておきます。

（現代語訳）

そのほうは、畳師として「天下一」の称号をもっている。信長が御朱印を与え、いろいろな公の事業を免許したのであるから、これからについても、秀吉のお墨付きを与えて、この通り間違いないことを証明する。

天正一一年〔一五八三〕一二月二〇日

石見（伊阿弥）

『玄以法印下知状』に含まれる下知状の日付を見ると、天正一一年〔一五八三〕のものが大半で、翌天正一二年〔一五八四〕のものが少し含まれています。本能寺の変が天正一〇年〔一五八二〕であることを考慮すると、京都にはいった秀吉が戦後処理を急いでおこなったことがうかがえます。石見（伊阿弥）への下知状からわかるのは、信長が商工業者に与えた権利を、秀吉も尊重して保障するという姿勢です。

江戸時代の元禄年間に刊行された『人倫訓蒙図彙』（一六九〇）第六巻は職人尽ですが、この図の説明文の中に、「畳師伊阿弥」が六角油小路町に住んでいることが記されています。京都大学付属図書館のデータベース（http://hdl.handle.net/2433/18072）から影印をダウンロードできますので、次に引用しましょう。挿絵には、今日の畳屋と同じ仕事のやり方が描かれています（影印から一部を切り取って引用します）。ちなみに、畳が一般民家に普及するのは、明治時代以降のことで、江戸期までは、室内に文様入りの薄縁の畳が敷けるのは、どちらかというと地位が高いことの象徴でした。

畳師（『人倫訓蒙図彙』元禄三年〔一六九〇〕刊、第六巻）
京都大学付属図書館のデータベース（http://hdl.handle.net/2433/18072）

畳師　畳といふは、今の薄縁をいふもの也、畳置て是を敷ゆへ也。今時禁裏御畳屋、烏丸通八幡町の下大針

加賀、同通四条上ル丁伊阿弥筑後、油小路六角下ル丁同長門、大坂道修町道頓堀、京堀川中立賣の下、其他所々にあり。

『人倫訓蒙図彙』（元禄三年〔一六九〇〕刊行）第六巻

禁裏に出入りする畳屋として列挙している中に、烏丸通四条上ル町に伊阿弥筑後、油小路通六角下ル町に伊阿弥長門が住んでいることが記されています。

本能寺の変が天正一〇年〔一五八二〕、伊阿弥への下知状（『玄以法印下知状』）が天正一一年〔一五八三〕、本能寺が豊臣秀吉の命で現在の地に移転したのが、天正一五年〔一五八七〕。下知状が下されたときの伊阿弥の居所ははっきりしませんが、油小路通六角下ルの東側は、本能寺の故地ですから、何らかの縁故があって、ここに居を定めたのかもしれません。

■　肉桂水の怪

本シリーズ第2回でも説明しましたが、堀川（江戸時代には、このあたりは開渠。現在は暗渠）と西洞院川（江戸時代は、六角通までは暗渠で、六角通から開渠になっている。今はすべて暗渠）が流れていたために、このあたりは井戸が沢山あり、良質の地下水がえられました。いくつか名水と呼ばれるものがありましたが、徐々に水位が下がり、とどめは四条通の阪急地下鉄工事。この結果、多くは涸れてしまいました。

そのような名水の一つが肉桂水。『改訂京都民俗志』の説明によれば、

中京区小川通り蛸薬師上る民家の庭にある。周囲に石垣のある窪地の底にあって、石段を降りると（地面から一・三メートル下）ちょっとした平地に円井戸（径五五センチ、井戸側が地面から上がっていない）があって、三〇センチばかり下に水がある。いまは廃水となっているが、昔は肉桂のにおいがあるとて茶の湯に珍重されたと伝えられている。また楊枝水とも称えられた。

『改訂京都民俗志』（井上頼寿、ワイド版東洋文庫一二九、平凡社、一九六八、八三ページ）

さらに、信長首洗井ともいい、明智光秀が織田信長の首を洗った井戸であるとも伝えていると書いていますが、この辺が本能寺の故地であったことから考えられた伝承の類でしょう。所在地は、小川通蛸薬師上ルと記されています。

ところが、『拾遺都名所図会』巻一では、次に示すように、所在地は新町通六角の南とあります。

肉桂水
新町通六角の南、人家の奥にあり。竟て清冷にして寒暑に増減なく、自然と香気あり、故に名とす。

地元の広報誌（『本能学区まちづくりのしおり』）によると、西洞院通蛸薬師上ル東側の和田家に肉桂水と呼ばれる井戸が残っているそうです。ただし、水は涸れているようです。この付近は、古くは、後鳥羽上皇御所で、のちに両替商三井家の本拠地となっ

たところ。現在は、新町通に沿ったところは、京都逓信病院が立地しています。和田家は三井家より一部を譲り受けて現在にいたっているそうです。

『拾遺都名所図会』の記載を新町通六角の南の西側と考えると、地元の広報誌は同じところを差しているとみてよい。一方で、地元の広報誌の肉桂水の写真と、『改訂京都民俗志』の描写とは符合しているようです。これは、『改訂京都民俗志』が誤って、一筋ずれた場所を記載していると考えるべきでしょう（『改訂京都民俗志』の描写が具体的なので、一度、許可をえて和田家を訪問して確かめる必要があります）。

『山城名勝志』巻四には、この近辺では、「富樫水（とがしのみず）」、「車水（くるまのみず）」などの項があり、次のような記載があります。現在は消えてしまったようです。

富樫（とがしの）水

和名集云、洛中名水ノ内富樫ノ水四條ノ坊門堀川の西頬是元筭之舊跡。従二水車ノ地一、現二此在所一。近代成レ井

車水（くるまのみず）

和名集云、洛中名水ノ内車水四條堀川従二水車ノ地一、現二此在所一。近代成レ井

堀川高校のあるところ（堀川通四条上ル四坊堀川町）は、江戸時代に藤堂藩邸があったところですが、さらにその前は、古田織部の屋敷。京都市埋蔵文化財研究所の『リーフレット京都』No. 一九二（二〇〇四）考古アラカルト31「桃山文化の陶磁器〜つちの中から〜」によると、古田織部の屋敷跡（堀川通四条上ル四坊堀川町）で大量の陶器が出土しています。中でも、桐の紋を図案化した青織部角皿（一七世紀初頭の醒ヶ井通の側溝から出土）したものが見事です。

地元の広報誌（『本能学区まちづくりのしおり』）によると、古田織部の屋敷に「醒ヶ井」があったと伝えられています。古田織部の屋敷には、有名な茶室「燕庵（えんなん）」があったと伝えられていますので（のちに、藪内家に移築されています。本シリーズ第14回参照）、当然のことに井戸があったと考えられます（『拾遺都名所図会』の「藪内茶亭庭中の図」にも、燕庵の傍らに井戸が書き込まれています）。もしかしたら、燕庵の井戸を「醒ヶ井」と呼んでいたのかもしれない、と想像がふくらみます（ちなみに、第2回で紹介したように、藪内家六代竹陰が一七九〇年〔寛政二年〕に左女牛井（さめがい）を修復しています）。本シリーズ第2回では「醒ヶ井水―新醒ヶ井（にいさめがい）」は、「左女牛井（さめがい）」を同じ水脈で掘りなおしたものと紹介しましたが、古田織部の屋敷に醒ヶ井があったすれば、ごく近くですから、これを掘りなおしたと紹介したほうがよいかもしれません。ただ、地元の広報誌（『本能学区まちづくりのしおり』）の記載が、どの文献によるのかは確かめることができませんでしたので、いまのところは単なる当て推量です。

町名看板「六角通西洞院東入本能寺町」④は、別のスポンサーのものですが、手書き書体が好ましい。この町名看板は、「中京区」になっていて、しかも、左から右へ書いてあります。

六角通を西へ。醒ヶ井通が突き当たった丁字路の東南かど近くに町名看板「醒ヶ井通六角下ル越後突抜町」⑤。スポンサーのと

六角通西洞院　西入　本能寺町④

醒ケ井通　六角　下ル越後突抜町⑤

ころが切り離されていますが、これも、「中京区」となっているので、別のスポンサーのもの。

越後突抜町は、小堀遠州（天正七年〔一五七九〕～正保四年〔一六四七〕）の京屋敷があったところ。『洛中絵図』（京都大学付属図書館蔵）によれば、醒ヶ井通の東、油小路通の西、蛸薬師通の北、六角通の南の区画に小堀某の屋敷が記入されています。作事奉行として、宮中の造営をはじめとして、寺院や神社の建築に指揮したほか、作庭にもすぐれていました。そのほかには、きれいさびと称される茶の湯。後半生は、伏見奉行（一六二三～一六四七）として、伏見の奉行屋敷に住み、そこで死去しました（小堀遠州は、今回の野口家住宅の説明にも出てきました）。越後突抜町には、小堀遠州の甥の子孫が、以後明治維新まで、代々京都代官として住みました。『京町鑑』では、六角通の横町として、「越後町」をあげ、その南側を「六角越後突抜町、一名綛屋町とも云」と記して、次のように説明しています。

此町東側小堀備中守殿御屋敷有。此辻子南の辻は蛸薬師通也。

白露『京町鑑』、宝暦十二年〔一七六二〕
『新修京都叢書第十巻　山城名跡巡行志・京町鑑』
光彩社（一九六八）

町名看板⑤から少し南に下がったところに、「三浦太幸堂」（醒ヶ井通六角下ル越後突抜町）。寛政年間〔一七八九～一八〇一〕創業の日本太鼓製造元。雅楽用太鼓、能楽用太鼓、胴長太鼓など各種。ホームページ（http://www.miura-taikoudo.com/）をみると、日本太鼓の種類の豊富さには驚きます。

三浦太幸堂

プロフィール
藤田眞作〔ふじたしんさく〕。一九四四年〔昭和十九年〕北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（http://xymtex.com）を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第27回）2010/07/05
© 2007, 2008,2010 藤田眞作 http://xymtex.com